

No. 153号

OB・Gニュース

二〇二〇年一月号

発行責任者

社民党がんばればOB・G福島の会

メール huruya.michitatsu@orange.plala.or.jp

五輪より

輪の花

被災地へ

伊東 功(福島市)

「桜を見る会」に政治の私物化を見る

桜は、私たちの生活に馴染んできた花だ。ところで安倍政権は「来年の花見は無い」という。何の説明も無しに。野党が(もちろん多くの国民もそうだが)問題視するのは、招待基準を骨抜きにし、地元関係者を招き私物化をしていることにある。

開催要領では、招待範囲を皇族、各国大使、各界の代表者をはじめ、「各界の功績者・功労者」とされている。では、そこに集まり、安倍夫妻を囲んでおさまっている記念写真を見て、多くの国民は「なぜこの方が招待されたの」という疑問を持つたことは確実であろう。しかも、その招待者の数

明けましておめでとうございます

私たちの生活要求を実現するために「社民党応援高齢者の会」を立ち上げました。今後もこの目標をにかけて来るべき総選挙に臨みましょう。

2020年1月

会長 杉原 二雄

副会長 河辺 信雄

佐藤 幸夫

事務局長 降矢 通敦

は年々増加し、2014年は13700人、その費用は3000万円であったのが、2019年には18200人、支出された金額は5500万円と言っ膨大な公費が使われている。

そしてこの問題をめぐる国会での質疑応答がある。野党は「招待者名簿を明らかにせよ」とせまった。これに対し内閣府は「破棄をした」と答えている。しかも破棄したのは「障害者職員」だったと安倍首相は答えている。「障害を持つているために上部の指示をはき違えた」と言わんばかりの言葉である。これには「日本の態度の象徴」と批判的に取り上げた海外のメディアもあつたと報じている。

(毎日新聞12月14日)

また、前夜祭と称した東京都内の有名ホテルでの会食がある。その費用は一人5000円であったという。仮に安倍事務所の持ち出しがあれば「公職選挙法違反」となる。そこで頑強に「参加者自前の会食」と述べつづけている。しかし、庶民の感覚からしても考えられない金額であり、誰も信用しない。そして翌日、その参加者は「桜を見る会場」に17台のバスを連れて参加をしている。

さらに、昨年4月都道府県会議員を対象にした研修会が東京都内で開催された。そして希望

者を翌日の「桜を見る会」に出席させていたことが関係者などへの取材で判明した。毎日新聞が自民党都道府県連などに確認した調査では、大阪や岐阜で「研修会」に出席すれば「見る会」に出られたとの回答があつた。例年、大部分の自民党都道府県連の幹事長ら幹部に招待状が届いていたが、昨年は少なくとも京都(28人)、福島(29人)、滋賀(22人)の3府県連所属の府・県会議員が招待されていたことも判明している。また、今年の招待者のうち8000名が自民党関係であることも明らかになっている。まさに、時の権力、しかもその権力の政治の私物化が現れた一つであることは、もはや言い逃れはできないし、させてはならない。

一部からは「いつまで『桜』を取り上げているのか」という批判の声がある。しかし、日本の政治の「民主主義が侵されている危機」のあることを知るべきである。

また、『熱血 与良政談 「こんな官僚に誰がした』で、次の様に述べている。《首相を守らなければ人事で飛ばされる。そんな官僚の恐怖心があります。広がつているのだらう。でも、あなたたちは、こんな尻ぬぐいのような仕事を懸命にするために官僚になったのか。首相のためでなく、国のため、国民のために志したのではなかったか》と。

毎日新聞(12月4日東京夕刊)

1月号から新しく川柳「原発事故」を掲載いたします。作者は県職労の組合員であつた伊藤功さん(福島市)です。どうぞよろしく。(事務局)

安倍内閣の「憲法解釈変更」

「兵器輸出解禁」で勢い

昨年の11月18日から20日までの3日間、千葉の幕張メッセで「武器見本市」が開催された。会場周辺では、市民団体が「日本を武器商人国家にするな」との抗議行動が行われたことが報じられていたが、開催期間が3日間ということもあってか、国民の間に広まっではない。

このような展示会は、2年に一回ロンドンで開催をされてきたが、イギリス以外では今回が初めてである。それでは日本が、世界最大規模の見本市の開催地に選ばれたのはなぜだろう。それは開會式における実行委員長(元防衛事務次官・西正典氏)の「内外の会社が集まり、新しいビジネスにつなげる機会になる」ということが重要だ(東京新聞11月18日)という挨拶でも明らかである。

防衛省の来年度の概算要求は、過去最大となる5兆3000億円規模と増大をした。加えて日本の高い技術力がある。軍事評論家が「火ダネを抱えるアジア諸国への足掛かりにするもの」と語っているが、主催をした企業の本音はまさにそこにある。つまりアジア、中でも日本は注目される防衛市場になっているということである。

そして私たちが忘れてはならないものに、安倍内閣は、2014年に「武器を防衛装備品」と読み替え、従来の武器輸出の原則禁止を改めて「防衛装備品」の輸出を可能にした。

憲法第九条には「武力による威嚇又は武力の行

使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」と謳われている。にもかかわらず「武器を防衛装備品」と読み替えてまで、「武器の輸出チャンス」を軍事産業に与えようとしたことは間違いのない事実である。



防衛装備庁が展示した
陸上自衛隊の10式戦車

展示は戦闘機・戦車・ミサイルの模型まで

出店をした企業は国内からおおよそ60社、海外からは90社であった。各企業のブースには、戦闘機や戦車、ミサイルの模型、ドローン関連の精密機械などが展示され、企業や各国軍部の関係者が興味深そうに説明を受けたとある。

また、弾薬の輸送を船で行うドイツの企業の担当者は「初めて開催される展示会だと聞いてアピールするために来ました。自衛隊向けの仕事はすでにに行っていますが、日本は防衛関係の市場がさらに伸びると予想されるので期待しています」と。さらに無人機やレーザーなどを製造するイスラエ

ルの国有企業の担当者は「北朝鮮からの弾道ミサイルの脅威ははわれわれと同じである、われわれは解決策を持っている。日本は防衛予算が膨らんでいる。アメリカからの調達が多いが他の国にも目を向けてほしい。自衛隊にもアピールしたいが、それ以上に日本企業との共同開発をしたいと思っ

9条は「僕らの活動」を

支えてくれるリアルで大きな力

：アフガニスタンで逝った中村哲医師の言葉・・・
「そうなんですよ。ほんとうにそうなんです。僕は憲法9条なんて、特に意識したことはなかった。でもね、向こうに行つて、9条がバックボーンとして僕らの活動を支えていてくれる。これが我々を守ってきてくれたんだという実感がありますよ。体で感じた想いですよ。

武器など絶対に使用しないで、平和を具現化する。それが具体的な形として存在しているのが日本という国の平和憲法9条ですよ。それを、現地の人たちも分かってくれているんです。だから、政府側も反政府側も、タリバンだって我々には手を出さない。むしろ、守ってくれているんです。9条があるから、海外ではこれまで絶対に銃を撃たなかつた日本。それが、ほんとうの日本の強味なんですよ」
(マガジン9の人に聞きたいより)



【ニュースを読んで】



■連合の退職者会(大分県退職者団体連合)の総会に出席してきました。13単産・単組約1万5千人の組織です。参院選32の一人区選挙で、九州でただ一人、無所属新人(革新系)当選の中心的役割を果たしたのが連合大分の退職者の会です。当選した人の名は「安達きよし(澄)」といいますが、共産党を含めた全野党共闘が結実したものです。彼が今後どこに所属するのか注目していますがあまり期待はしていません。国民民主が立憲民主になるのではと思いますが。「桜を見る会」は、森友・加計学園で逃げ回った安倍が、またもや何とかなると逃げ回っている姿が滑稽で、追い詰められれば「自己都合解散」に打つて出ることも無きにもあらず、0.4%の支持率を素直に受け止め、野党共闘の実現に汗をかくべきです。

■県議選は台風被害の後片付けと重なってしまい、延期すべきだったのではと思っています。いわきでも狩野さんの地元が水害に会い、選挙どころではなかったようです。残念です。「桜をみる会」は徹底的に調べなければなりませんね、選挙の時に公職選挙法に違反しないか。政権与党だからズルしいといとなれば、この国は卑怯者の集まりになってしまいます。私も税金の私物化を許さない市民の会に入り告発人に名を連ねました。OB・Gの会が「居間からのよびかけ」を提起されたように自分のできることで参加する、私も具体的に動き始

めました。ともにあきらめずにがんばりましょう。

■追伸にあった、「あなたがいなくとも職場は回る」というのは、私もよく聞きましたし、自分が早期退職するときにも、そう自覚していました。でも、運動や活動においては、そうではないと思います。運動は「志」や「持続する意思」に支えられるから、人が変われば引き継がれることはないと思います。諦めてしまったり、挫折したままその現状に甘んじたりすれば、そこで運動は終わります。運動が終わるということは、それが次世代に引き継がれなくなってしまう、ということではないでしょうか。いつでも終わらせることができる、と思いつつ続けることの大切さを思います。

長期政権の記録が出たと同時に「桜を見る会」の不祥事が出てきたのは、けつして偶然ではないと思います。「桜を見る会」が問題なのではなく、そこに表れた政権のゆるみ、惰性、驕りが問題なのではないでしょうか。「こんなことより、もつと大事な問題があるだろう」という火消しは、早く幕引きをはかりたい政権の応援歌にしかならないでしょう。問題は一見、些細に見えても、証拠隠し、文書破棄、誠実のない答弁という体質は一向に変わらず、むしろ、その悪質さは増す一方です。「居直り」を見過ごしてはいけないと思います。私はこの長期政権がもたらした害の最大のもは、モラル荒廃と、「居直つても平気」という墮落なのだろうと感じます。仲代達矢さんの思いは、深く胸に刺さりました。年配になってからしか語れないことは、それだけ記憶が重いからなのだと思います。

戦争の体験者が少なくなればなるほど、後継世代は、聴く耳を敏感にして、より注意深くあらねば、という気がします。高浜の話は、他人事ではありません。電源三法とその後の固定資産税、あるいは事故が起きたあとの「迷惑料」の構図は沖縄でも同じですし、1Rも構図はそのままです。一時の夢をふりまき、その失敗のあとも、地域に税金を投入して地域を黙らせるという構図が続くかぎり、同じことが繰り返されるのではないのでしょうか。地方の疲弊は、自分たちの地域の自立を放棄し、他力本願になることによって、より問題が深化すると思います。

■「桜を見る会」の問題は、実に低レベルのくだらない問題のように見えますが、「指摘のように民主主義の根幹にすらかかわるものだと思っています。民主主義をないがしろにする現政権の姿勢を示す象徴的な問題だと思っています。政権のいい加減な答弁、説明を聞くにつれ、ほんとうに「この国はどへ…」と感嘆してしまいます。機を逃してはならないとの「指摘全く同感です。少し気になるのは、TVニュースで何人かの若い人がインタビュで「桜を見る会の何が問題かわからない」と言っていることでした。戦後70年の民主主義の歩みが後退することなど以前は考えたことすらありませんでしたが、若い人のこのような声を聞くと、言葉が力をなくしている、あるいは何か社会の底辺で地滑り的な変化が起きているような、恐ろしさを感じることがあります。



【視点】

2019年出生数、90万人割れ確実

「2019年に生まれた赤ちゃんの数が90万人割れし、過去最少となるのが確実になったことが厚生労働省への取材で分かった。同省の研究機関はこれまで90万人割れを21年と見込んでおり、推計より2年早い。想定を超えて加速する少子化である」。

(共同通信12月6日)

町中で、顔そっくりな双子の赤ちゃんがベビーカーに乗っているのを見る。また3人の子どもを連れてたのしげに歩いている若い夫婦を見る。その姿に「ありがとう。元気に育ててくださいね」と心で祈る。しかし、男性の3割、女性の2割が「生涯独身」、「結婚しない」生き方の時代がやってくると言われている。もちろん人生の選択は本人によるが、経済的理由によつて拒絶されることは許せない。学歴はどうあれ就職をする。そしてその就職で結婚をし、子どもを産み育てることが可能とする職場と賃金を求めたい。このことは我が子や孫の将来を危惧する高齢者の共通の願いであろう。

朝のドラマ「スカレット」を観て

73年前の記憶を取り戻す

朝7時30分から始まるNHK連続テレビ小説は楽しみにしています。現役時代であれば、この時は「時間との戦争」でした。職場への足は路線バスですからなおのことでした。しかし、今、この時間は、朝食を終えた朱福の時です。さて、現在の番組の

「スカレット」の一場面です。若手陶芸家が日本画の有名な画師を前にして、「我が家の家宝にしていた先生の絵を闇市で売り白米と卵三個に代えてしまった」と、涙を流して告白をした場面がありました。

そうなのです。当時はいわゆる「物々交換」の社会でした。大事にしていたかけなしの物を取り出しては田舎へ、そして闇市へと足を運びました。

夫を亡くし女手で三人の子どもを育てていた母は、夫の「仙台袴」を米二升と何がしかの食べ物と交換をしました。そしてその米を「壺」にいれ油紙で包み床下に埋めました。戦争も末期、仙台大空襲があつた翌日「日本は敗れる」という風評を飛び交う中、母はその壺を取り出して炊きました。

二升の白米に私たち三人は飛びつき食りました。その我が子の姿を母はどんな思いで見たいだろうか。小学六年・三年、そして5歳であつた私たち兄妹には気づくことはありませんでした。

食べ残しが、山と積み重ねられる飽食の時代。あらためて73年前の記憶を取り戻し、語り続けることの必要を痛感したひと時でした。(ふるや記)

日常的に、監視カメラに身をさらす

地下鉄サリン事件の殺人容疑で逮捕された、高橋克也容疑者を追い詰めたのが公開された防犯・監視カメラの映像であつた。さらに事件が起きるたびに監視カメラの映像が記事になる。では日本国内における監視カメラの現状はどうなっているのか。その数や設置の状況について答えを出すの

が難しいと専門家は述べている。

日本防犯設備協会がまとめたところでは、周辺装置まで含めた日本の防犯カメラ市場規模は、1360億円(2010年)。「売れ筋の防犯カメラは1台あたり7万〜10万円程度」(メーカー関係者)とすれば、単純計算で年間100万台以上売れていることになるが、近年は価格競争が激しく買い換え需要や周辺機器も含まれているから、新設置件数は割り出せないという。

また、公的な機関と違い、民間企業などは防犯カメラの数や設置の有無については口を閉ざす。「お客様を監視している」という誤解を招きかねないといった意識からである。例えば、坪あたりで防犯カメラが最も多く設置されているのはパチンコ店であるが、海外製の安い防犯カメラが多くその実態はわからない。現在数百万台は存在し、さらに急増をしているという。監視カメラは万引き防止や空き巣被害などへの防犯効果を期待して設置されるケースが多かつたが、今はマンシヨンのエントランスやエレベーター、コインパーキングや飲料の自動販売機などにまで設置されている。タクシーや自家用車につけられている車載カメラまで含めると、都会でカメラに映らないように生活するのはほぼ不可能の状態であるという。

私は監視されるようなことはやっていないという済むだろうか。日常的に監視されている社会に住んでいると考えれば恐ろしいことである。

